

木下利玄論

「冬がまた来る」が生まれるまで

田中拓也

①はじめに

竹柏会が輩出した歌人の中で、一際大きな光彩を放っている一人が木下利玄である。・街をゆき子供^{こども}の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

『紅玉』より

掲出歌は大正八年七月に発行された第二歌集『紅玉』に収められている一首である。長い間、小・中学校の国語の教科書に掲載されているほか、様々なアンソロジーにも所収されており、利玄の作品の中で最も人口に膾炙している作品と言えるだろう。

この一首の初出は『白樺』大正四年一月号とされている。確かに、雑誌に「作品」として最初に発表されたのは『白樺』の同号であるが、実は「心の花」大正三年・十二月号の「霜月の曙会」(記録 川田順)の中に「町を行き小供のそばを通る時蜜柑の香せり冬が又来る」(注1)が掲載されている。「曙会」は当時の在京歌人が開催

していた勉強会であり、信綱の指導を仰ぐのではなく、参加者が同等の立場で批評をしあう研鑽の場であった。(注2)

本稿では、木下利玄の「心の花」誌上の作品を確認しつつ、代表歌「街をゆき…」が生まれるまでの過程を考察してみたい。

②生い立ち

木下利玄は明治十九年一月一日に岡山县賀陽郡足守町(現在の岡山市北区足守)で生まれた。父は最後の足守藩主・木下利恭の弟・利永。母はその側室の瀬原やす。六人兄弟の次男であった。明治二十三年に伯父の利恭が没したことによって利玄の人生は大きく変化する。利恭に嗣子がいなかったため、利玄は養嗣子となり、五歳にして木下家の当主となったのである。同年十一月、利玄は実の両親と別れ、木下家の旧家老・木下岡次郎と利恭の近習であった二階堂左馬七とともに上京し、東京の神田神保

町の本邸に入った。その時期のことを利玄は次のように回想している。

東京に来てからの私の生活は實に潤ひのない寂しいものでした。(中略)私は女中下男ばかりの索漠たる家へ歸るのです。私は陰鬱な思ふ事も快活に云へない少年として育ちつつありました。それでかういふ境遇から來たのか、又は私の父の神道國學などに興味を持つてゐたのが傳はつたものか、私はいつの頃から俳句や歌のやうなものに注意するやうになり、新聞の歌や俳句を切抜いたり昔の歌を寫したりする事を樂しむやうになりました。(「道」より 傍線筆者) 実の両親と五歳で別離し、養嗣子として養育される日々の中で「歌や俳句」に慰藉をもとめていった利玄の心情は察するに余りある。もちろん、明治になったとはいえ、江戸の感覚が色濃く残る時代である。現代に生きる我々の感覚の尺度で利玄の心情を

推し量ることは難しい。だが、利玄の幼少期の心情は冒頭の「私の生活は実に潤ひのない寂しいものでした」に象徴されていると思う。

③ 竹柏会への入門

明治三十二年十月十七日、利玄は木下岡次郎に伴われて、佐佐木信綱のもとを訪れ、竹柏会に入会する。先述の「道」には二階堂の息子が城北中学で川田順と既知の間柄であり、彼から竹柏会を勧められたことが入会のきっかけであったと記されている。だが、木下岡次郎の日記では事前に岡次郎が信綱邸を訪問し、面談していることが記されている。冷静に考えると、木下家の若き当主である利玄に個人の意志が容易に通る環境にあったとは思えない。同年は正岡子規が「根岸短歌会」を、与謝野鉄幹が「東京新詩社」を創立している。そうした状況の中で、利玄が誰に師事するかは、木下家の重要課題となったに違いない。そんな中で、国学の系譜を持つとともに華族の師弟を多く抱える佐佐木信綱の竹柏会が最適と判断されたのであろう。

先生のモットーは「急がずたゆまず」

「古歌を読む事」「自分で作る事」でありました。(中略) 初め詠草を先生に示す時、質が好いと云はれるか何うかを非常な熱心を以て待つたのを覚えておます。

(「道」より 傍線筆者)

当時、信綱は二十八歳。「竹柏会」を創立し、希望に燃えていた時期である。利玄は十四歳。学習院中等科に在籍し、寮生活での友人たちとの交流に解放感を感じていた時期である。その年齢差は十四歳。大家を仰ぎみるというよりは、若く情熱ある先生に間近く接する利玄の様子が想像できる。また、「質が好いと云はれるか何うかを非常な熱心を以て待つた」という言葉から、利玄が信綱による「評価」を強く意識していたことが伺える。さらに、信綱の指導を受けていた状況について、利玄は次のように詳述している。

佐佐木先生の處へは、日曜に家に歸ると、四谷から俤で小川町迄詠草を見てもらひに行きました。此頃先生は主に徳川時代歌人の歌集を読めと云はれ、自分が次回にいいと思つた歌に印をつけて行くと、それについて所感を述べられた。

私は當時加納諸平や井出曙覧や大隈言

道の歌などは、中々興味があり好きでした。先生は私の家の先祖に長嘯子のゐる事を屢々云つて、私を勵まされました。

(「道」より 傍線筆者)

これらの記述から読み取れるのは、利玄が江戸時代の和歌を学ぶことを通して、作歌の基盤を築いたということである。もちろん、明治中期に生きる人々にとって、江戸時代は「ひと昔前」であり、加納諸平や井出曙覧(橘曙覧)、大隈言道といった歌人は我々が感じるよりも、身近な存在であったであろう。信綱が薦めるこれらの歌人の作品を読みつつ、利玄の作歌の基礎が培われたことは重視すべきことと思う。

「心の花」誌上に初めて掲載された利玄の作品は次の一首である。
・月にむかひ君が残りし書よみてきえし光を志のぶ夜半かな

「心の花」明治三十三年七月月号「懷舊佐々木弘綱翁追悼歌会兼題」という題詠作品の中に利玄の作品が一首ある。この年の「心の花」誌上に掲載された利玄の作品はこの一首のみ。次に利玄の短歌が載るのは約半年後である。

・戀人はみどり子抱きておとづれぬ十年を

すぎていへに歸れば

「心の花」明治三十四年二月号

「雪のはな」という作品欄に並ぶ一首である。十四人の作品が並んでいるが、信綱の指導を受けていた会員たちの作品を掲載した欄と思われる。利玄の一首は「雑詠」の中に掲載されている。また、同号の「竹柏園歌会」(一月十一日神田三河屋にて開催)の約八十首の中に利玄の作品が掲載されている。

・天の下四方の國內に光みちて東のそらゆ
初日さしのぼる

「心の花」明治三十四年二月号

これらの作品を読んで思うのは、利玄が信綱の指導を受け、基本的な和歌の詠み方を身に付けようとしている点である。この時期の利玄の他の作品も確認しておきたい。

「柳の上枝」

・天地の笑めるすがたにさそはれて星もゑみ
けり花もゑみけり

「心の花」明治三十四年六月号

「那木の下枝」

・子どもらが濁して去りし里川の堤さびし
きつき見ぐさかな
・ねたる松かたぶける松たてる松一里つら
なる磯のみちかな

・すずしければ主人まだこぬ別荘の庭のは
す池はすのはななく

・道のべの小川のながれせきとめてあひる
かひたり山かげの家

・裏まちにうちすてられし犬の子のなく聲
さむき冬のあめかな

「心の花」明治三十四年八月号

利玄の作品は信綱の選を受けた作品として、掲載されている。「柳の上枝」「那木の下枝」というタイトルからも、「竹柏」「柳」から派生した「下枝」「上枝」である弟子たちの作品を掲載したという信綱の想いを想像することは容易にできる。

さて、作品に注目すると、オーソドックスな作風の中に、独特なリズムが垣間見えることに気づく。「星もゑみけり花もゑみけり」の対句表現。「ねたる松」の中の「る」に重心を置いた押韻。「庭のはす池はすのはななく」の繰り返しの表現。もちろん、これらのリズムは、信綱の添削による成果かもしれないが、利玄作品の特徴の一端が表れているようにも思う。

しかし、明治三十四年以降の「心の花」誌上に利玄の作品が掲載される機会は減少していく。やがて、巻末に記されている「竹

柏園歌会」の参加者名の中にも名前が見られなくなる。

中學を卒業する前後は、歌に對する興味は、大分冷却して來ました。しかし歌を作らずにある時は、何か務を果してゐないやうに思はれ、寂しい氣がしました。此頃迄の歌は『竹柏園集』あけぼの『玉琴』等の竹柏會版の歌集にあるが、是迄は自覺して作歌してゐたとは云へません。(「道」より 傍線筆者)

『定本 木下利玄全集』(臨川書店)の年譜を確認しても、当時の利玄は学習院の「輔仁會雑誌」に短歌や文章を発表する機会が増えていることがわかる。

利玄の活動の場が、竹柏會「心の花」から、学習院の「輔仁會雑誌」に変化していったのは、ごく自然な流れと思う。②で確認したように、利玄の短歌への希求が「寂しさ」を紛らわす手段として生まれたものであれば、師弟関係で創作をする時間よりも、同級生との交流の中で創作に励む時間に充実を感じるのは道理だと思う。そんな利玄にとって、「竹柏會」は物足りない場になりつつあったのであろう。学習院中等科を卒業し、高等科に進んだ利玄はますます

す校内誌での執筆に精を出すようになる。それと同時に「心の花」誌上の作品は減少していったのだが、ある歌会を機に、利玄に変化が生まれるのである。

④ 利玄の転機

「心の花」には明治時代から各地の歌会記録が継続して掲載されているが、「心の花」明治三十七年四月号の「歌會一束」の中に「彌生會」の記事が掲載される。同会に関する詳細な記述はなく、歌会に参加した者の作品と名前のみが小さな活字に並んでいるだけである。同会は東京で開催されており、第一回の参加者は九名。すべて男性と思われる。注目すべき点として、参加者の中に澤式の名前が確認できる点が挙げられる。澤は後に竹柏会のターニングポイントとなる勉強会「曙会」の中心メンバーの一人である。この他にも後の「曙会」に参加する神山源之、小柳清、佐々木慶三らの名前が確認できる。「彌生會」は私が誌面を確認した範囲では、明治三十七年から明治三十八年まで、十一回開催されている。その中で、利玄の参加が確認できるのは八回。それまで歌会に参加することが減り、

「心の花」誌上に掲載される作品も減少していた利玄が「彌生會」には立て続けに出席するのである。この会の特徴は信綱という指導者が不在であることである。つまり、師から弟子への指導ではなく、相互批評の場であったことが想定されるのである。同会の利玄の作品をいくつか確認したい。

・傘さして行嫁人の群にあひぬ春雨烟ふる
葉畑中道

「心の花」明治三十八年二月号
・風無きに牡丹花散る鴻臚館春暮方の夕べ
淋しき

「心の花」明治三十八年三月号
「彌生會」で確認できる利玄の作品は八首。当時、利玄が竹柏会「心の花」から徐々に活動の中心を学習院の仲間である武者小路実篤や志賀直哉との同人誌活動に移っていたことは周知の事実である。だが、明治三十八年に短期間ではあるが「彌生會」に熱心に参加し、相互批評をおこなっていたことは注目すべきことと思う。

⑤ 「曙会」への参加

「年譜」に拠ると、利玄を巡る環境は明治三十九年に大きく変化している。同年は

実父の逝去、本邸の移築といった木下家主としての大きな出来事があった。また、交流していた学習院の同級生である武者小路実篤や志賀直哉らと雑誌発行（後の『白樺』）の計画を立てるのもこの時期である。さらに、高等科を卒業し、東京帝国大学への進学を決めている。

今の時代と当時の若者の感覚は相当異なる。だが、利玄の特殊な生い立ちを踏まえて考えると明治三十八年から三十九年にかけての周辺の変化は利玄の心に少なからぬ変化をもたらしたであろう。

また、竹柏会においても同年は大きな変化がおこる。前章で触れた「曙会」が明治三十九年七月に初めて開催されるのである。「曙会」は竹柏会の在京歌人による勉強会で、信綱に指導を受ける場ではなかった。この会に利玄は積極的に参加する様子が確認できる。同会の活動の一端は「心の花」誌上に掲載されており、高山邦男が参加者の一覧表を「佐佐木信綱研究」第六号に掲載している。それを見ると、利玄が熱心に同会に参加している様子がわかる。同会の様子を記した石樽千亦による記事を抄出した。

心の花出でて満十年、幾多の變遷と盛衰とを経たる今年明治四十一年一月十三日、わが曙會は本年の發會を京橋南鍛冶町なる吉田氏の一案に開かれた。(中略) いざ評と成つて來てから、一首一首盛に論難攻撃が交換せらるゝ活況を呈した。その結果は作物その物はほんの借物としておいて、趣味の論が起る、詩型の説が出る、全部の評が終つて更に議論が蒸反される、外には人立も仕かぬまじき高聲になるといふ盛んな有様であつた。

「心の花」明治四十一年二月号
同記事の後半には具体的な議論の言葉が並んでいるが、その議論は現在にも通じるような詩歌の根源に関わる話題が多い。同号の利玄の作品とその評を見てみたい。

・線香の烟の糸は秋風に低くなびきぬ一葉の墓 利玄

(信) 秋風と早く世を去りたる天才とよく調和せり、感深し、

(式) 烟の糸、低く、一葉、わざとらし、われは何となくかゝる歌を好まず、

(信) 糸といふ題目よりすれば變れる想、
題目を外にすれば、秋風と一葉の墓よく調和せり、祇王祇女の墓を詠せ

るものありし外、墓を詠ざるをきかず、其點よりするも面白し、

「信」は信綱、「式」は澤式である。利玄の作品を「調和」の観点と、「古歌」を踏まえた観点で評価する信綱に対して、言葉の選択から厳しく批判する澤の評言がスリリングである。

・友禪の模様の蝶を肩あげに片羽かくしてぬへる糸かな 利玄

(式) 歌は兎に角想を取る

(千) 模様のなきをも友禪といひ得るにや、結句題の爲に穢となれり、改むべし、肩あげほつて片羽あらはれたるやうに歌はゞ、寧面白かるべし、

(信) 纖巧艶麗

(松) うつくしき歌なれど、今少し余情深くありたかりし

(信) 余情を主とする歌は別にあるべし、(雨) 要するに未製品なり、

「千」は石樽千亦、「松」は平田松堂、「雨」は新井雨泉である。題詠「糸」の作品について、細部を議論する様子が伺える。さらに、利玄の作品を高く評価する信綱の評言に対する手厳しい反論が交わされている点にも注目したい。

さらに、興味深いことを利玄は「道」の中で述べている。

是迄私は、調和といふやうな事を氣にして、歌を弄んでゐた事に、氣がつきました。つまり歌を作る時には、何か洒落たものといふ氣が、知らず識らず働いて、例へば上の句に春の淡雪があるから、下の句は白梅では調和が悪い、紅梅の方がいいなどと云ふ、考へ方をするやうになつてゐました。(「道」より)

まさに、「調和」は信綱が歌評の際に重視していた観点である。利玄はこの超克には『白樺』に寄贈された窪田空穂歌集で気づいたと記しているが、その根底には「曙會」での批評があつたことは間違いないと思う。

⑥「冬がまた來る」の誕生

「曙會」の歴史を紐解くと、いくつかの転換点があることがわかる。その一つが大正三年二月の「自由題」の導入であつた。この月の参加者に信綱の名前はない。そして、川田順が初参加したかは判然としなような会話が交わされたかは判然としない。だが、「自由題」となった翌月の参加者が十五名、「極めて盛會」という記述が

あることから、おおいに盛り上がったものと思われる。そして、「自由題」を導入して、数か月後の十一月の「曙会」で利玄のあの歌が生まれる。

・町を行き小供のそばを通る時檳柑の香せり冬が又来る

利玄

(利) 結句「又冬が来る」とする方がいいかも知れぬ、

(順) 否々、

(千) 「檳柑の香せり」はよいつかまへ物だと思ふ、

(鷗) 二三の句子供が動かないで居る様だ、止つて居ていゝでは無いか、二三人

かたまつて立つて居るのだ、

(弐) 草木の見えない下町の住居の、然も

僕等の様なガチャ／＼した商賣して

ゐる奴は秋も冬も分らなく暮らして

ゐる、それが祇園亭の横町から大通

に出る、唐物屋の取壊された前に露

店で果物を賣つてゐる、そこに七面

鳥づらの惡太郎共が檳柑の皮をヒン

むいて居たので、そう／＼もう來月

は暮だつたと思つたのはホン二三日

前の事であつた、此歌に接して感深し、

本人の自作の評、川田順、石樽千亦、角鷗東、新井洗、澤式による評が面白い。特に澤の評は生々しい。常に厳しい評を述べる澤が「感深し」、情景を語る場面には心打たれるものがある。利玄は『白樺』大正四年一月号に本作を含む連作を発表する。

⑦ 最後に

現在、木下利玄の歌壇における評価は同時代に活躍した北原白秋や若山牧水と比して決して高いものとはいえない。今回の特集記事を書くにあたり、「心の花」の木下利玄追悼号を読みなおしたが、そこには追悼号とは思えない辛辣な言葉も並んでいた。しかし、だからといって今なお愛唱される利玄の価値は揺らぐものではない。今回、本稿を記すうえで、利玄の名歌が誕生するまでに明治・大正期の竹柏会の勉強会が果たした役割を再認識することができたことも収穫のひとつである。

注1 本稿では誌面の都合上、旧字体を新字体に適宜改めている。しかし、本引用歌は推敲過程を明確にするうえでも元の表記を用いて、正確に引用している。

注2 「曙会」については、佐佐木幸綱「佐佐木信綱論の一章」(『心の花』昭和三十九年・四月号)、矢部雅之「『あけぼの會』と信綱」(『心の花』平成十八年・六月号)、高山邦男「『あけぼの會』と佐佐木信綱」(『佐佐木信綱研究』第六号)に詳しい論と基礎研究が掲載されている。本稿執筆にあたり、上記の三論文を参照したことを明記しておく。

※引用文は『定本木下利玄全集 散文篇』(弘文堂 昭和十五年)に拠ります。

木下利玄『銀』論

宿命的経験より生まれた『銀』

西村康平

『銀』は大正三年（1914年）五月二十六日発行された。木下利玄が二十八歳の時に世に出た第一歌集である。十六歳から二十八歳までの二百九十九首の作品が収められ、初版本では逆年順に編まれている。

木下利玄は明治四十四年に横尾照子と結婚し、大正元年には長男利公が誕生するが、五日間生きてすぐに死去している。『銀』の巻頭に「我が亡き子利公」とあるのは利玄の利公を弔うと同時に悲しみの底からの親心と捉えることができる。そして歌集中の「利公の爲めに」は『銀』の中核をなす部分と言える。歌集成立時の背景を念頭に置きながら作品世界を見てゆきたい。

- ・東京を遠く南に感じつゝ、白石町をとばとばあるく
- ・板の間のくらきに昼の遊女おしを見つゝ、我が身は行きすぎしなり
- ・棹にほす子供の着物うつりたる雨後の場末のうす濁り川

・いましがた我が身のありし丘をよそに汽車は汽車とて走せずきにけり

（『銀』大正三年五月二十六日）

陸奥の旅から始まる本歌集。一首目は東京という自分の住む中心を周辺から眺めるという構成であり、二首目も同様に昼の遊女を見ている自分を客観視するという構成である。当初歌集の題が『わが身』であったことから自身への意識、こだわりというものが色濃く反映されている。三首目は子供を歌っているが、「雨後の場末のうす濁り川」という鬱屈とした景が読み込まれている。利公を喪った後の歌であり、利公を思う気持ちが感ぜられる。四首目は一首目と二首目と同じように我が身を含んだ情景を第三の目で見つめている。その視線は決してあたかなものではなく、どこか物侘しく、悲しみが漂っていることがわかる。『銀』が利公の為という前提がある上、利公を失った後の歌ということからも利玄

の眼差しに暗い影がある。もう少し「わが身」に関する歌を抽出していきたい。

・人帰りさくらしらみてくるゝなりわが身ひとつはいかにすべくむ

・高き木の新芽あたら見あぐるわが肌の汗ばみいとし夏の秋波あきなみ

・我が顔に青き光を受けながら藪かげ草の肌身をのぞく

・足袋ぬげば春の皮膚はだへと我が素足すあしもつれあふこそわりなかりけれ

歌集の五十首目、五十二〜五十四首目を抜き出しているが、このあたりでは集中的に「わが身」について歌われている。利玄は文芸雑誌『白樺』の創刊にも参加しており、自身の短歌を発表している。人間性を重んじる人道主義を掲げていた白樺派である。志賀直哉、有島武郎、武者小路実篤などの作家との交流もあり、作風については影響を受けていたことが想像される。会派の作風に影響を受ける習作期を読み解く上

でヒントとなる四首である。一首目は何かの集まり、もしくは宴会の後の孤独感を歌ったもので、いささか抽象的である。白む桜とわが身ひとつの取り合わせは寂しさをいっそう深くしている。二首目、自身への意識は継続しながらも、他者への意識も登場する。秋波は美人の涼しい目もと、女性のごびを含んだ目つきという意味である。夏の汗ばむひと場面を歌いながら、何処か清涼感が漂うのは「新芽」、「いとし」、「秋波」といった語の影響だろう。そんな自身への意識が続く三首目。「藪かげ」は『銀』の中でも散見されるモチーフである。自然の事物を歌いながら、肌身という肉体を想起させる語によって歌に余韻を与えている。四首目も三首目と同様に、肉体を想起させる語を用いながら、より一層意識は自身へと向いている。目には見えない春の皮膚と感覚が共有される素足がもつれあうイメージはなんとも斬新であり、自身を見つめる眼差しの解像度は上がっている。

そして『銀』の中心と言える「利公の爲めに」に目を移していきたい。

・あすなろの高き梢を風わたるわれは涙の目をしばたゝく

・愛らしき眼を見はりつゝ息づける苦しき様を見るに堪へかぬ

・人皆に見捨てられたる床の上にわがをさな児が眼をひらきある

・人々を力なき目に見まはせし汝がいぢらしさ忘れかねつとも

いずれの歌も「め」（目、眼）に意識が向けられている。自身の「め」、そして利公の「め」。利公は月足らず、つまり未熟児として産まれたようで外界での生活に耐えることができなかったようである。三首目の人皆に見捨てられた子という過大な表現もたつた五日間で我が子と死別した利玄の心境を推測すると理解できよう。「め」（目、眼）という事物をトリガーとして、悲しみは深くなつてゆく。

・うけ口のくちびるの色変れるに水をそゝぎて見つめ見つむる

・友禅のをんなのごとき小袖着て嬰兒は瓶の底にしづみぬ

・父母の涙ぬぐひしハンケチを顔にあてやり棺にをさむ

・墓地の杉蟬はなけどもいとし子は姿も見えず土に入りつゝ

・若き母頭痛むに手を当てゝむかふわが

子の墓標の白さ

・線香の煙墓標をめぐるを二人ふりむき去りがてにする（大正元年八月―九月）

歌の配列については、およそ利公の今際の際からしばらくの時を経た順となっている。利玄の妻は神経を刺激して身体に何かあつてはいけないという周囲の考えで我が子の死に顔を見ることができなかったという。またハンカチの他に、人形や歌を書いた紙を入れたとある。くちびるの色、友禅染の死装束、濡れたハンカチ、墓地の蟬、墓標の白さ、どの叙景も臨場感に溢れ、利玄の深い内省を捉えることができる。初子を喪うという宿命的な経験、そして何より親心から生まれたこの一連は多くの人の心を撲つことであろう。いずれの歌も悲哀に満ちた挽歌であるが、対象を細かに丁寧に見て、写し取るうという作歌の姿勢がこの習作期からも見てとれる。『銀』は利玄の準備期という意見も見られる。一方で内面を深く見つづつ、官能的感傷的な初期の作風があつたからこそ後年の作風に至ることができたはずである。利玄を読み解く上で多くのヒントが『銀』には詰まっている。

木下利玄『紅玉』論

旅を通した自然の歌と愛児への挽歌

竹井成美

第二歌集『紅玉』は、大正五年六月からの長期旅を終え、住吉（兵庫県）での仮住まいで自ら編集し、八年七月に発刊された。利玄の習作時期とされる第一歌集『銀』の作風から脱し、第三歌集『一路』へと繋ぐ、利玄特有の世界観を新たに樹立して行く五一七首からなる。

大正元年八月の誕生間もない長男・利公の死、そして大正三年誕生の次男・二郎も二歳に届かず死去。相次ぐ不幸で失意のどん底にあった妻・照子を伴い、関西、山陰、九州各地を、時には逗留しながら、ひなびた地を気ままに転々と巡る、ある意味、無謀とさえ思える旅であるが、その時々、自然が魂を揺さぶり、最終的に別府での長女・夏子の誕生と死を経て、利玄の歌風を確立させて行く旅でもあったと言える。

歌集は、旅が始まる前の日常での自然描写の歌から、大正四年十二月死去の「二郎に」で一転、悲しみの歌に。

・亡き吾子の帽子のうらの汚れみてその天死をいたいにけにおぼゆ

病に苦しみ死去した愛児の最期を見届け、思い出に浸る父親の悲哀が溢れる。

そして、旅の始まりと思われる「出石より久美濱へ」の「小學校生徒遠遊」の収録歌には、少年らの姿に二郎の成長した姿を重ねるかのような次の歌がある。

・少年等相ひつれおよぎはじめたり見てあれば寧ろかなしきろかも

・子供らはおよぎかへり來護衛船やうやく大きく見えてきたりぬ

第一首は、未だ二郎の死の悲しみから脱していない利玄の目には、少年らへの教師の指導は酷であり、少年らをむしろ不憫に思う姿が、第二首の、無事に戻る姿に胸を撫でおろす利玄が目につかぶ。

旅は進み、時々に出会う自然が利玄の内なる悲しみを外に向けさせるかのように、大正五年十一月の、出雲から石見へ向かう

歌には、一味違う利玄独自の歌が展開する。
・料理屋の二階の灯かげ三味の音寒月の下にいたくさびしも

・春おひたる垂穂のおもみ百姓はたへつ、あゆむ一足ひとあし

第一首は、「月光」の収録歌で、旅籠にたどり着くも、灯と三味の音さえ、寒月の下では利玄の心を癒すには至らなかったか。

第二首は、「晩歸」の収録歌で、刈穂を背負い、その重さに耐えながら家路を急ぐ百姓の姿は、まさにミレーの「晩鐘」や「落穂ひろい」の風景を彷彿とさせる。

利玄自身『李青集』に「：刈穂を背負つて来る百姓たちを見た時や：その事象の中に、自分が歌に作り度いと思ふものを瞭然と見ました」と記している歌であろう。

とりわけ、第一首の結句「いたくさびしも」と、第二首の結句「一足ひとあし」には、自然描写の中に人間的情感を秘めた歌人としての利玄誕生の予感がする。

九州各地の一人旅を含め、大正五年十二月から一年余りの逗留地・別府での十三首からなる「波浪」の収録歌には、利玄の歌人としての生命力を感じさせる歌が並ぶ。
・のびあたり倒れんとする潮波蒼々たる立ちのゆゝしも

その巻頭歌で、打ち寄せる波が大きく立ち上がり砕け散る一瞬の青々とした様はなんと素晴らしいことかと、躍動する波を擬人的に克明に描写し、「ゆゝし」という表現には利玄特有の感性が光る。

同じく別府での「接骨木の新芽」の収録歌には、それとは趣の異なる歌が続く。

・にはとこの新芽ほどけぬその中にその中の芽のたゝまりてある

大正六年六月の初めての女兒・夏子の誕生の前に、「にはとこ」の新芽に、生まれる子の存在を重ね、その誕生を心待ちにする父親の想いが透けて見える。

しかし、夏子誕生の喜びも束の間、病状悪化で、またしても愛児を失うことになる。

歌集最後に置かれた「夏子に」は、破格の五十五首からなる。別府から移り住んだ住吉での「住吉日記」には、夏子の死から立ち直れない中に改作を重ねて完成する過

程が記されている。病院から葬儀、谷中の墓地まで、夏子を父親の記憶として克明に歌の中に残すことで、夭逝した愛児への挽歌としたことが推測される。

いずれの歌も、夏子の死を一連の物語のように綴っているが、中でも次の歌は、父親としての悼惜と慟哭に胸が痛む。

・金輪際なくなる子を聲かぎりこの世のもの呼びにけるかな

一方、「夏子に」の最後に置かれた次の二首は、愛児三人への詫び状とも読める。

・おくつきは並びたれどもうつし世に相ひ逢はざりし吾子三人はや

・これやこの三人の吾子の墓どころ土のしめりに身をかゝめけり

愛児たちは相まみえることなくこの世を去り「土のしめり」の中で並んで横たわる。愛児たちの死を親として悲しむだけでなく、相まみえることの叶わなかった三人相互の悲しみにまで想いをいたし、ひたすら詫びる利玄がそこにいるようだ。

その最後の句「土のしめり」は、『紅玉』巻頭に「土のしめり」としてあり、自選歌集『立春』には次の一首が選ばれている。
・草はみなしめれる土にめいくのかげを

おとせり日の夕ぐれに

この歌の「みな」と「めいくのかげ」は、愛児三人が暗示されているようにも思える。

日記にも、「夏子に」が何度か登場後に、『紅玉』整理、「土のしめり」完了、と時系列で確認でき、冒頭「土のしめり」は、愛児との思い出を閉じ込め、新たに詠まれた可能性も考えられよう。

その真意はともかく、自らの編集と、日記によると最後に佐佐木信綱の意見を求めた、思い入れの強い歌集『紅玉』として世に送りだしたと考えられる。

利玄は、長期にわたる旅と愛児三人の死を通して、時に父親として、時に歌人として、心のうちに私的なものを秘めつつも、その事象そのものの有り様と美を絵画的描写で綴り、利玄独自の歌の世界を樹立して行ったと言える。

※引用歌は五島茂編『木下利玄全歌集』(岩波書店 一九五一年)に拠ります。

木下利玄『一路』論

利玄の音楽

高良真実

木下利玄は「心の花」の後輩である五島茂に愛された歌人だった。全集の解説も茂の手による。茂の没後は、『白樺』派唯一の歌人として文学研究の題材になるのみだ。

この状況にあって、「心の花」の系譜であるから、という理由を越えて、利玄の歌を顧みることはできるだろうか。本稿では利玄回顧の意義を、生前最後に刊行された歌集である『一路』を通して考えていきたい。

利玄の歌の特徴は、大胆な字余りと口語的発想、そして「利玄調」と呼ばれることもある四・四調の韻律にある。四・四調の作例を一首引こう。

・山に酔へる眼をひき入れて我れの前に奈落へ低まる傾れのひろがり

木下利玄『一路』(一九二四)

「富士山へ上る」と題された一連から引いた。下句に注目すると、四句目が「ならくへひくまる」と八音、結句も「なだれの

ひろがり」と八音になっている。四・四調というのは、「なだれの」「ひろがり」とフリーズが四音二つによって構成されていることによる呼称だ。結句字余りももったりとした韻律になることから避けられがちであるが、利玄はそれを恐れず、むしろ富士山頂から見た傾れの雄大さを描写するためにこれを利用している。

字余りの例をもう少し見てみよう。

・軍艦の八幡ゆるがぬ胸なかをさゞなみうちり湾のしづけさ

・近頃は四海波静かなれば軍艦もこの浦に來てどんたくをせり

歌集巻末を飾る歌を引いた。一首目は二句目八音の四・四調。二句目は二句目が十一音の大きな破調となっている。「どんたく」はオランダ語の日曜日、転じて休日の意味する。軍艦は国家の軍事力の象徴であるが、利玄にかかれればのっそりとした海獣のごとく描写されてしまっている。短歌

の発想は童謡的であり、親しみやすい。

「親しみ」は利玄鑑賞における一つのキーワードになりそうだ。飾らずに言えば、かわい、とてもなろうか。方向性の似ている歌をもう少し引いてみる。

・宵の雪かつとけてゐる樋の音つくくきけば弾みて鳴れり

・前に堂横に塔あり埴白き境内われ等を容れてしづもる

この二首には押韻がある。一首目では「宵」と「樋」で「oi」の頭韻、二首目では「堂」と「塔」で「ou」の脚韻が踏まれている。

内容面では飾るところがない。一首目では降雪の音と、雪が溶けて樋を伝う水の音の両方が弾んでいることだけが語られている。二首目でも宿泊している寺の境内が静かであることだけを描写している。これらの歌から想像される主体像は朴訥だ。

押韻だけでなく擬音語・擬態語の多用も『一路』の特徴として挙げることができる。

・寒き日の街道を来て里川のどんぐり橋を踏みわたりたり

・まなかひの葵うるさみ首ふれる祭の馬が

こぼこぼとほる

・足ぶみする子供こどもの力ちから寄り集りあつまりとまろく
と廊下ろうかが鳴るも

一首目には「下野国栗野」と詞書がついている。「どんぐり橋」は踏むと音がする木製の橋であり、「里川」と同様に固有名詞ではない。それにしても、音が鳴るというのは楽しい。子ども用の靴には歩くとびいびい鳴るものがあつて、それを履いた子どもは実に楽しそうに歩くものであるが、利玄も歩いたそばから音が鳴るので楽しかったのかも知れない。何を隠そう「どんぐり橋」は連作のタイトルになっている。結句の助動詞を「たり」としたのも、「わたりたり」と音を繰り返す意図があつてのことだろう。

二首目は馬の動作がかわいい歌だ。京都の葵祭を訪れた際のもので、詞書には「馬も額に葵葉をつけられ居り」とある。念のため「形容詞の語幹」+「み」は「形容詞」なので「」を意味する古い用法であること
を注記しておく。つまり馬は視界に入る葵

の葉っぱがうるさいので首を振っているわけだ。

三首目はまた足音の歌である。利玄が幼稚園を訪れた際の歌で、訪問の理由は連作中特に明示されていない。しかしながら、なんとなく子どもが好きであろうことは伝わってくる。ただ騒がしいとするのではなく「子供の力」とした点からも、子ども達に対する親しみのまなざしは見取れる。思い返せば、『一路』初版本の装幀も手鞠遊びをする少女の絵であつた。

こままで利玄の童謡的な作例を見てきたのであるが、同様の方向性をもつ歌人には北原白秋がいる。利玄を白秋に比肩する歌人として語ることは可能だろうか。

・かはたれのロウデンバツハ芥子の花ほのかに過ぎし夏はなつかし

北原白秋『桐の花』(一九一三)

脚韻を含む白秋の歌を引いた。この歌では「バツハ」と「はな」で「a a」の音が共通している。ロウデンバツハは川の名であらう。川とそのほとりに咲く芥子の花を過ぎて来た夏を懐かしむのであるが、先に引いた「わたりたり」同様に、「なつかし」には既に「なつ」が含まれている。この歌

に代表されるように白秋は瀟洒であり、対する利玄は朴訥である。言葉の魔力という観点からも、西洋の地名を引用する白秋には敵わないだろう。

洗練された韻律を目指すのであれば、範をとるべきは利玄よりも白秋である。功利的に考えるならば、やはり「心の花」の系譜であることを除いて利玄回顧の意義を考えることは難しそうだ。

しかしながら、功利的な動機だけで歌を鑑賞するのは貧しい。現代の喧噪を離れたいときには、ゆったりとした利玄の音楽に耳をかたむけるのも悪くないと思う。『一路』の歌はいつでも穏やかだ。
・日向路の街道埃灰かいちまひばこり馬車ばしやにて日ひねもす南みなみす南みなみす

木下利玄『一路』(一九二四)

※引用歌は『現代短歌全集 第五卷』(筑摩書房)所収の『一路』(大正十三年十二月二十五日 竹柏会発行)に拠ります。

木下利玄『みかんの木』論

「名越日記」から考える

久松宏二

①『みかんの木』と利玄の日記

「第四歌集『みかんの木』は利玄を不朽にした集。故人危篤の床に遺囑を受けて私が編集、遺稿として大正十四年十二月世に問うた歌文集『李青集』の一部。（中略）

大正十三年始から十四年一月、死の数週間までに及ぶ。収載歌数一一一首。（岩波文庫

『木下利玄全集』五島茂編 一九五一年発行）の五島茂解説である。その後、昭和十二年に『短歌文学全集 木下利玄篇（第一書房）』、同十五年『木下利玄全集散文篇（弘文堂）』ではそれまで未発表の日記が掲載された。この編集をした石樽茂（五島茂と同一。以下五島）は次のように記す。「日記の光によつて利玄作品を見ることが利玄作品への理解にとつていかに至重であるか、僕は今度それを痛感した。」（前出第一書房「利玄篇」後記）。また『みかんの木』との関係については「この最後の時期は病

気悪化の為に、散文は殆んど口授筆記に加筆し、日記はより多く自己執筆だが、いづれも極めて短いもの乍ら短歌作品の前進深化と対応して（以下略）（前出弘文堂「散文篇」解説。傍線筆者以下同）と述べる。

②大正十三年の利玄の状態

大正十一年春、肺結核にかなり以来病臥。この頃の日記について五島は『みかんの木』への深化をはらむで病臥にすでに馴れてしづかなる境涯を示し、自然風物を更にふかく視つめ、古人の伝記をよみふかめてゐる日の日記（前出「散文篇」）と位置付ける。本稿では大正十三年の「名越日記」に『みかんの木』への深化をはらむでいる様を見る。

③『みかんの木（室内花卉十五首）』

「みかんの木（室内花卉）」に日記が反映している記事。なお、この部分は五島の、第一書房「利玄編」に取り上げられるが、より

詳しく関係性を指摘する。（日記は適宜略す）五月一日午前、葛西ヶ谷の間嶋弟彦氏より使来り、庭園の牡丹五輪、白、真紅、もゝ、いろ三種、チューリップ一鉢に手紙が添つて「山一つ隔てゝ住んでゐるが、まだお訪ねもしないが、余の健康は如何か。けふこの花をおくる。」

牡丹には、けさの小雨の露が結んでゐて、富貴濃艶美麗さ、何とも云へぬ。独りで見るのが物足りないほどだ。

二日きのふ贈られた牡丹の花、飽かず眺めた。

十九日夕刻、間嶋氏より使ひにて、芍薬、白と赤紫、バラ赤五花、樺一輪おくつてくれた。非常に美し。

二十三日間嶋弟彦氏より使にて薔薇の剪花数輪おくらる。

鮮らしき薔薇の剪花朝園の缺の音をきくこゝちする

といふ一首を書いて、礼状を使ひに渡す。

六月十八日夕方、間嶋氏から使ひで、紫陽花、アマリリス：おくられた。けさ同氏へ花の歌十数首を手紙で示したところ、よろこんで来た。

その後「日光」一一九（同十三年十二月）に次の連作が載った。（全十一首のうち六首抜粋）

或人より花をおくられたるに

牡丹の花にむすべる玉は今朝ほどのきり雨の露か萌たきかもよ

（牡丹）

艶々の白と紅との牡丹花受け朝鮮の壺のふくらみゆたか

花を下に嬌がもてこし茎ながの白芍薬に

蟻つきてをり

（芍薬）

瓶に挿す芍薬の花茎長にかたむきかかりて此方に薫る

剪花の紅ばら挿せば美々しかる簇りつくればり壺一ぱいに

（薔薇）

瓶に挿す燕脂紅ばら朱紅のばら見るに心のときめきおぼゆ

日記六月十八日に「花の歌十数首を手紙で示した」とあり、これが右の連作と考えられる。その後「みかんの木（室内花卉）」では、薔薇の歌が四首加わり全十五首となる。その一首が五月二三日の「鮮らしき」

の歌だ。以上のように、日記には「室内花卉」の由来が載る。そして日記の傍線部からも、歌の「前進深化」の様が見て取れる。

④ 芭蕉への思い

一月八日紅玉堂から、半田氏著「芭蕉俳句新譚」一冊送つてくれた。

三月十日花屋日記を読む。芭蕉の死に臨んでの、凜然たる態度、師弟の情誼の美しさ等、人を感動せしめる。

九月二十四日「潮音」の「芭蕉俳句研究」よんだ。

十月七日「續芭蕉俳句研究」読む。二十

日 芭蕉俳句研究よむ。二十三日 芭蕉

俳句研究よみ了る。面白かった。二十四日「芭蕉の言葉」よむ。面白かった。

十一月十五日ピオニロ社より「芭蕉研究」送り来る。二十四日「芭蕉俳句研究」よむ。二十五日「芭蕉俳句研究」よむ。

十二月六日「芭蕉俳句研究」よみ了つた。

続編ほど油がのつてゐないので興味が少い。大正十三年の利玄に、芭蕉への関心が強くあつたことがわかる。前年十一月にも、半

田良平「芭蕉の句釈」など読むとある。更に十月二三日には「午後風あらく、木枯を

おもはず。裏山ざわめく『夜もすがら秋風きくや裏の山』の句をおもふ」とある。大正十三年三月十日の「花屋日記」読後、利玄は自らの死に臨んでの態度を芭蕉に重ね合わせようとしたのであろう。また九月以降「潮音」の「芭蕉俳句研究」の記事が続く。

太田水穂は幸田露伴・安倍能成・阿部次郎らと「芭蕉研究会」を同九年に組織し、芭蕉研究に没頭。『芭蕉俳句研究』十一年『続芭蕉俳句研究』十三年刊行。「潮音」十七（同十三年）の「芭蕉俳句研究」四二（最終回）まで座談合評（その後も継続）が連載される。利玄の日記の「面白かった」には「潮音」などを通しての芭蕉への傾倒ぶりが注目される。そして芭蕉俳句研究への関心は『みかんの木』への前進深化をはらむ「要素の一つであつたと考えておきたい」。

⑤ 終わりに

本稿では「室内花卉」と「芭蕉への思い」を日記にみた。「名越日記」の、利玄に贈られた物や利玄が読んだ本など読み取るところは大切である。病臥の生活で、これらが利玄の創作延いては「みかんの木」作歌に繋がると思われるからである。